

<研究ノート>

幼児教育における自然保育の展開

— “さあ森へ行こう！”の事例をもとに—

安東裕子・武田信吾

Development of Early Childhood Education and Care in Nature:

A Case Study on “Let’s Go to the Forest!”

ANDO Yuko, TAKEDA Shingo

キーワード：自然保育，森

Key Words: Early Childhood Education and Care in Nature, Forest

I. はじめに

幼児教育の祖であるフリードリッヒ・フレーベル(1782～1852)は、「人間および子どもが自然を心からよく知り、自然と心から融合することが、自己の天職に向かつての子どもの発達にとって、人間の教育にとって、諸民族および人類の陶冶にとって、はなはだ重要」と述べ、こどもと自然との関わりの重要性を指摘した¹⁾。彼の自然哲学は、キリスト教に基づきながら、万有に神性が内在すると主張する独自の宗教観とも関連する²⁾。こうしたフレーベルの教育理念を実践することは、1906年に宣教師のH・Jベネット夫妻によって創設された愛真幼稚園(当時は「鳥取幼稚園」)にとって重要な意味を持ってきた³⁾。2003年に、新園舎を建設するにあたっては、自然環境を一層充実させることを必須事項とした⁴⁾。また、教師の研修機会においては自然保育実践を扱った内容のものに積極的に参加し、そこで得た知見をもとにして不断に保育環境の見直しを図ってきた。

上記の流れのなかで、園外での自然体験活動にも力を入れたいという思いが、園の教師に育まれていった。市街地を所在地とする園ではあるが、週1回の園外保育において、様々な自然環境の場所に出かけるようになった。回数を多く重ねるごとに、長い距離や起伏のある道をたくましく歩いたり、生き物や植物に触れ共感し合ったりしている姿が多く見られるようになるなど、こどもたちに変化が現れていった。こどもたちの成長を多く目にしていく過程で、こどもたちがこれまで以上に自然のなかで心と体を開放し、一人ひとりの感性を磨いて欲しい、そのために、もっと思いきり遊ぶことのできる魅力的な場所が欲しいという願いが、教師の間で日々強くなっていった。そこで、こどもたちの生きる力を培い、自然との触れ合い方を更に深めるために、新たに自然のなかで遊ぶためのフィールドを探すこととなった。のちに園の教師とこどもたちによって「ひみつのもり」と命名されることになるフィールドの森が定まってからは、保護者の方々の支援を受け、教師の勉強会などを重ねながら開拓を進め、現在はこどもたちが遊ぶ段階まできている。

以前より、我が国の幼児教育・保育現場では自然体験活動が様々な形で取り組まれてきたが、例えば2015年には「日本自然保育学会」、2017年には「森のようちえん全国ネットワーク連盟」、2018年には「森と自然の育ちと学び自治体ネットワーク」が設立されるなど、近年は、各

方面でその動きが益々盛んになってきている。本稿は、愛真幼稚園の園外保育における自然保育の実践活動について、フィールドの選定から遊びの展開までの一連の流れを振り返るとともに、こどもが遊ぶ実際の姿から捉えた実践上の成果と課題をまとめたものである。フィールドの森はあまり人の手が入っていなかったこともあり、1 から整備し、保育環境として構成していく活動自体が稀有な取り組みであると考えられる。左記のプロセスで得られた情報を整理して提示することは、自然保育実践の知見を拡充する一助となるのではないかと期待する。なお、本文中のこどもの活動の様子を映した写真は、保護者からの承諾を得た上で掲載している。

Ⅱ．フィールドの森ができあがるまでの経緯

1．場所の選定

自然保育を行うフィールドは、幼稚園から離れていない場所、歩いてでも行ける場所という条件をもとにして絞り込み、現地に赴いてこどもたちが遊ぶ様子を想像しながら選定を行い、最終的に鳥取市久松山を所在地とする樗谿（おおちだに）公園の奥の森に定めた。そして、土地の管理者である鳥取森林管理署から保育を行う場所として使用すること、環境を整えるために手を加えることの許可を2018年6月6日に取り付けた（1年更新）。フィールドの森は、園の教師が「あそびエリア」と「山登りエリア」と名付けた2つのエリアがある。前者は、周囲を斜面と木々に囲まれつつも比較的開けた場所であり、いくつか湧き水も流れている。後者は、大きな木で遮られていない斜面が比較的ゆるやかに上へと伸びている場所であり、木の枝や根などをつかみながら登っていくことも可能だと思われた。いずれも人の手があまり入っておらず、安全管理のためのチェックや整備は必要不可欠であった。

2．自然解説専門員とのフィールド散策

上記を理由として、実際に森のなかで自然保育を行う前に、教師自身が理解しておかなければならないことは少なくなかった。そこで、「氷ノ山自然ふれあい館 響の森」の自然解説専門員である岡田珠美氏にフィールドに足を運んでいただき、一緒に散策をする時間を設けることとした（図1）。岡田氏と樗谿公園からフィールドの森に行くまでの道を歩いている途中に、早速、うるしが発見された。うるしは触れるとかぶれるので、葉っぱの付き方をよく見ておく必要がある。フィールド到着後は、はじめ



図1 岡田氏とのフィールド散策

に「山登りエリア」に向かった。山登りの道は、1列になって登ることができる道である。頂上までは1本の道ではなく、右左どちらを通っても下山できると思われた。頂上はさほど広くなく、こども50人程が座れる程度の広さであった。頂上には鹿の糞があった。動物たちが暮らしている証拠である。次に、「あそびエリア」に向かった。到着と同時にカエルを発見した。岡田氏によると「タゴガエル」ということであった。タゴガエルは、水が美しく自然豊かな山奥や森林に生息しているカエルである。「あそびエリア」は、杉の木が何本も立っている平らな場所と、左右に斜面があり、その1つは山登りエリアとつながっていた。

岡田氏と散策を行った日は、どこで何の遊びをするのかは細かく決められなかったが、教師のなかでは、「この斜面は滑り台にいいね」、「この斜面を使って山登りエリアにいけるね」と大まかに考えたりすることができた。岡田氏からは、活動エリアにロープを張っておき、子どもたちに遊んでもよい範囲が分かるようにしておくことや、しっかり遊びこむために服装（長袖長ズボン）を整えること、ブルーシート、布、石、洗濯バサミなどを用意しておいた方が良くことなどのアドバイスをいただいた（図2）。また、必要となる整備内容につ



図2 岡田氏のアドバイスを参考にした 服装についての保護者への依頼内容

いては、枯れ木は倒れてきたり、落下したりする可能性があるので切っておくこと、笹も顔や目の高さのものは切るが、全部を切るのではなくフィールドのポイントが分かるようにあえて残す必要もあること、「山登りエリア」の道には目印のリボンを結んでおくこと、左記の整備は大掛かりなことなので、男手（男性保護者）が必要と思われるといったコメントをいただいた。

3. 保護者の協力による整備

翌月、フィールド内の整備を保護者の方々に募り、有志11名の方に来ていただいた。男性保護者には、子どもたちが歩く場所に生えている雑草、小枝、枯れ木を切っていただいた。大まかに教師が切る場所を指示していたが、保護者同士で「この辺りは切ってもいいですね」と自ら切っていったり、「ここをお願いします」や「こっちも道になりそうですね」と話し合ったりしながら主体的に作業を進めてくださった（図3）。子どもたちのために力を貸してくださった保護者のおかげで、フィールド内をすっきりと整備することができた。また、「こんなことができたら楽しいだろう」と様々な発想で場所作りを一緒に考えて作業してくださった。



図3 男性保護者による森の整備

4. 教師による環境構成

後日、教師でフィールドにて「あそびエリア」の整備を行った。まず、どの場所でのどのような遊びができるのかを考え、そして用意した材料をもとに遊び環境を整えていった。例えば、斜面にブルーシートをひき、ブルーシートの横にロープをたらし、上部にもロープを横に這わす形で「滑り台」を制作した（図4）。長めの枝を集めて切り株に差し込み、シダの葉っぱをつけて「木のおうち」を制作してみた（図5）。丸太は橋や椅子にしたり、家の柱にしたりなど、周囲にある素材は色々な用途で活用できた（図6）。その後、全員で危険個所をチェックし、最終確認を行った。あくまでこの日は、教師が考えたあそび（ターザンロープ、滑り台、崖登り、ハンモック、網ハンモック）で、「子どもたちが遊んだら楽しそうだろう」、「初回に子どもたち

が遊ぶときに、抵抗なく遊び場に踏み入れることができるように」という思いで環境をつくっていった。また、別日には「山登りエリア」の整備を行い、目印用のリボンをつけていった。



図4 教師による滑り台の制作 図5 教師による木のおうちの制作 図6 教師による自然素材の活用

Ⅲ. 保育実践・安全管理のための研修

自然保育を行う実践するにあたって必要となる保育実践・安全管理スキル向上のための研修としては、上記の岡田氏とのフィールド散策、「あそびエリア」と「山登りエリア」の整備のほか、DVD教材を用いた園内での勉強会、現地でのネイチャーゲーム体験や危険個所のチェック活動、そして先述した自然保育に関する研修への参加などを行ってきた。

DVD教材は、『のびのび遊べる！野外の引率 危険回避マニュアル』（講師：木村太郎，制作・販売：医療情報研究所）を用いた。当該DVDでは、四季ごとの環境リスクや動植物に起因するリスクとそれらの対応策、野外活動におけるリスクマネジメントが扱われている。人の持っている能力によってリスクは変わり、全ての専門家になりえず、情報を持っているだけでリスクは軽減できること、意外と身近なところにリスクの高い動植物が生息しており、どのようなものが生息しているかは地域性が高いこと、事前の情報収集が重要であり、リスクの有無について職員の中でシェアすることなどを学んだ。

現地での危険個所のチェックは、事前に綿密な形で実施することが重要であるが、活動場所の見直しは、こどもの実際の姿が契機となる部分もある。例えば、斜面にロープを付けて登れるようにした場所は、当初は、本人の意思を尊重して登らせ、「怖い」と言うこどもは下りさせるというスタンスをとることとしていた。しかしながら、実際の活動場面では、自分で登れるか登れないかの判断が難しいこどもが出てきたり、教師がつきっきりで対応しなければならない状況となったりしたため、斜面ロープの設置場所を変更することとした。また、斜面ロープで登った先から下ってくるルートには、こどもにとって不安定な箇所が存在していたため、適宜整備を行っていった。

本実践において、教師は活動中に最大4人はいるようにしている。こどもと一緒に遊んでみて、「ここは通りにくいな」、「ちょっと危険だな」と感じたことを、その日のうちに教師間で共通理解するために、フィールド内の地図を作成した（図7）。教師の間で、活動内での遊びの様子を伝えたり、配置を見直したり、危険箇所のチェックをする時に利用するためである。これは、こどもたちと一緒にフィールド内の地図を見ながら、「きょうはここにいったね」、「ここまでこれたぞ」と自分たちの活動エリアを書き込んでいくことにも活用できる

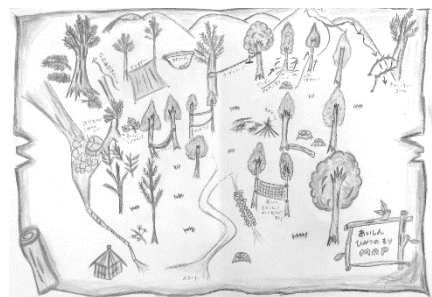


図7 教師が作成したフィールドの地図

と考える。

自然保育に関する研修としては、各都道府県・市町村等が主催する研修会への出席、自然保育に積極的に取り組む幼児教育・保育施設の視察、自然保育を専門とする外部講師による園内研修の実施などが挙げられる。近年、鳥取県では、2015年に森のようちえんへの支援事業として「とっとり森・里山等自然保育認証制度」、2017年に保育所・幼稚園・認定こども園・届出保育施設が行う自然保育を支援する「保育所、幼稚園等とっとり自然保育認証制度」が創設されるなど、県下の自然保育を後押しする行政が執り行われている。愛真幼稚園は、後者の制度の認証園でもある。鳥取県が主催する自然保育の研修会への参加を通して、自然保育を実践する他園の取り組みを知るとともに、鳥取県私立幼稚園・認定こども園教育研修大会(2019年8月)で自園の実践発表を行うなど、他園と情報交換する機会も適宜設けている。

以上、現地で定期的に環境をチェックすること、教師間の密な情報伝達を保つこと、継続的に教師研修会をすること、他にできるあそびはないかを常に考えること、こどもたちの普段の遊びの様子を見ながらどのような自然体験が必要か考えることなどは、今後も恒常的に行っていく必要があると考える。

IV. 実践内容とこどもの姿

1. 「あそびエリア」における年中組の実践記録

(1) 活動概要

- ・日時：2018年10月23日、10月30日、11月21日(計3回)
- ・「あそびエリア」での活動：ターザンロープ、ブルーシート滑り台、ハンモック、綱渡り、網ハンモック、ロープで山登り、虫探し、不思議な形の木探し、倒れている木を用いた遊び、冬イチゴ探し、焚火ごっこ、土粘土など
- ・こどもの準備物(メールにて保護者に事前連絡)：軍手、手ぬぐい、長袖長ズボン
- ・教師の準備物：ロープ、布、ハンモック、網、ブルーシート、白い紙、筆、プリンカップ、洗濯ばさみ、海苔の空き箱など

(2) 各活動場所でのこどもの様子

こどもたちに一番人気のあった活動場所は、自然にできた広めの面積の斜面にビニールシートを敷いて作成した「滑り台」であった(図8)。ビニールシートの左右の端に垂らしたロープをつたって登り、ビニールシートの上端に渡したロープをつたってスタート地点まで行き、滑り降りるように設定した。こどもたちがロープに集まりすぎてしまう状態となり、教師の声掛けが必要となった。初めの頃は、スタート地点でロープから手を放すタイミングがつかめないこどももいたが、回数をこなせば上手く滑れるようになっていった。自然にできた斜面は平らではなく、凸凹している場所も存在し、こどもたちはバウンドを楽しんでいる様子であった。



図8 滑り台での活動の様子

「ターザンロープ」は、スピードによって滑っても大丈夫と自分で判断した子どもたちが挑戦した（図9）。着地点は太い杉の木とし、その木を蹴って止めるように設定した。当初は、スタート地点はこどもの背よりやや高い位置にあったので、背が低い子どもは届きにくい状況であった。また、スタート地点に1人、持ち手をスタート地点に持って上がるのに1人と、教師は2人配置しなければならなかった。上記の反省点をふまえ、2回目以降の活動ではスタート地点を低く設定し、持ち手には紐をつけて、滑った後に子どもが自分で引っ張って行って、次の人に渡せるようにするようになった。



図9 ターザンロープでの活動の様子

他に、教師が設定した遊び場としては「網ハンモック」や「ハンモック」、「木のおうち」などがある。「網ハンモック」は、4本の木にロープを結び、網をつける形で設置した。その内1つの木にロープを1本つけておき、それをつたって登り、ハンモックの上へと移動するようにした（図10）。子どもたちは網の上で寝転がったり、跳ねてバウンドしたりして楽しんでいた。「ハンモック」は大きめの布を2つの木に括り付ける形で設置した（図11）。友達同士で揺らし合い、揺れの感覚が気に入った子どもは自分で長い時間乗っていた。「木のおうち」は、当初は子どもがあまり関わろうとしなかった。また、子どもが自分たちで木を組もうとしても、やり方が分からない様子であったので、教師がきっかけ作りをするなどの対応をとった（図12）。2回目の活動以降は、長めの枝で三角推型の骨子を作り、そこに布をかけ、布の端に石を置いて重しにするという手続きで、子どもと教師が協同でつくっていった。「木のおうち」で遊ぶ子どもは、女の子がほとんどであった。



図10 網ハンモックでの活動の様子



図11 ハンモックでの活動の様子



図12 木のおうちでの活動の様子

動植物に関わる活動として「生き物探し」がある。「あそびエリア」にカエルがいることが分かると、虫好きの子どもたちはカエル探しに夢中になった。「幼稚園に持って帰りたい」という子どももいたが、「また会いに来るね」と次回の出会いを期待する気持ちを共有しながら、「ひみつのもり」の生き物は持ち帰らないという約束をした。活動場所には冬イチゴも生えており、子どもたちの関心を引いていた。また、様々な大きさの木が倒れているため、横たわっている木の上に立って乗ったり、小さい枝を宛がって大工のように木を削る真似をしたりする姿も見られた（図13）。木の汁で描画を楽しんだり、その絵を「あそびエリア」に飾ったりする子どももいた（図14）。小さな沢のほわりには粘土質の土が堆積しており、土粘土の感触を楽しむこ

どもたちも現れた。その他、苔のついた土を丸めて焼きおにぎりにしたり、比較的大きめの石と枝を集めて焚火ごっこをしたりなど、森のなかでの活動だからこそ生まれた遊びが多様に展開していった(図15)。



図13 倒木に乗って遊ぶ様子



図14 木汁で描画する様子



図15 焚火ごっこをする様子

2. 「あそびエリア」における年少組の実践記録

(1) 活動概要

- ・日時：2018年11月12日，11月30日(計2回)
- ・「あそびエリア」での活動：網ハンモック，おうちごっこ，綱渡り，横たわっている木を用いた遊び，植物や木を使ったごっこ遊び，滑り台，沼での活動など
- ・こどもの準備物(手紙にて保護者に事前連絡)：軍手，手ぬぐい(結んだ状態で登園)，長袖長ズボン
- ・教師の準備物：ロープ，布，ハンモック，網，ブルーシート，白い紙，筆，プリンカップ，洗濯ばさみ，海苔の空き箱など

(2) 各活動場所でのこどもの様子

教師が活動の場をつくる遊びでは，こどもの実態に応じて，年中クラスの場合と異なる設置の仕方を行った。「滑り台」は，ロープをつたって登り，スタート地点まで行くことは難しいと判断した。ブルーシートは用いず，ロープを使わないでこどもが自分の力で登れる斜面を登り，土の上を直に滑るようにした(図16)。教師は，必要に応じてこどもたちにロープを使わないで登る方法を伝えた。滑る楽しみが分かると，こどもたちは土の汚れを気にせず何回も楽しむようになった。「網ハンモック」は，年少のこどもでも自分で網に上れるように，3本の木で網を張るようにした(図17)。活動当初はあまり使おうとしなかったが，2回目の活動以降では遊ぶこどもが増えてきた。年少クラスでの活動から新たに加えた「綱渡り」は，比較的开けた場所に，太めの木の幹に2本のロープを渡す形で設置した(図18)。この遊びも，2回目の活動以降に使うこどもが増えた。



図16 斜面を滑って遊ぶ様子



図17 網ハンモックで遊ぶ様子



図18 綱渡りで遊ぶ様子

「あそびエリア」には、年中クラスの教師と子どもたちが協同でつくった「木のおうち」の骨組みが残されており、年少クラスの子どもたちの関心を引いた。なかに入ってみたり、木を鍵に見立てながらおうちごっこを楽しんだりする姿が見られた（図 19）。横たわっている木の上に立って乗る姿が見られたのは、年中クラスと同様である。平均台のように木の上を歩いたり、馬乗りになって遊んだりすることもあった（図 20）。粘土質の土に触れて遊ぶ姿が見られたのも、また同様である。水がたまっている場所があれば、その周辺の沼地に入ってみたり、汚れた軍手を洗濯屋さんのつもりになって洗ったりすることもあった（図 21）。その他、杉の木をシャワーに見立てたり、あるいは焚火の火に見立ててお餅焼きごっこをしたり、またキツネの顔に似た木を見つけてそれを木のなかに入れて、ペットの飼育ごっこをしたりなど、フィールドに存在するあらゆる自然物が子どもたちのイメージを刺激し、様々なごっこ遊びが展開していった。



図 19 木のおうちに入る様子



図 20 倒木に馬乗りになる様子



図 21 水たまりの周りで遊ぶ様子

3. 「山登りエリア」における実践記録から

「山登りエリア」は、「あそびエリア」より続く一本道の登山コースであり、こどもの足だと 20 分程度で登ることができる距離である（図 22）。先述のように、登り下りするルートは事前に整備し、目印となるリボンやテープを木に結んでおいた。2018 年度は、年中クラスが全員で登る活動を 2 回行った。なお、年中クラスの 3 回目の活動では、「あそびエリア」で遊んでいる途中に、山に登りたい子どもが個別に登ることを教師が立ち会う形で認めたが、教師の目の行き届きにくくなる場面もあり、現在は、「あそびエリア」と「山登りエリア」の活動は区別して実施している。



図 22 山登りの様子

集団での山登りは、基本的に全員で一本道を通る活動である。それはつまり、ともに困難さが伴う道を登るという共通の体験となる。活動のなかでは、登る際の頑張りや工夫、登る過程での気付き、たどり着いた際の達成感などを共有する姿が見られた。先に行く者と後からついて行く者という関係性が自然に生まれることにより、両者の間で助け合いや労わり合いのやり取りが育まれていた。一方、一本道の坂では動きの緩急の差が生じやすく、木々の繁みや起伏のある地面は死角が生じやすい環境でもある。実践を通じて、教師の立ち位置には注意が必要であること、教師間の意思疎通は常に確保することの重要性を再確認した。

V. まとめと今後の課題

こどもの実態や環境に応じて、フィールド内での教師の配置や遊び場の設定の数をどのように決めるのか、当日のフィールドの地面のコンディションなどを踏まえながら、活動の一部または全体を中止するべきか否かなど、本実践を通じて、教師が状況に応じて総合的に判断することが必要な局面が具体的に見えてきた。楽しく遊ぶためには、しっかりと危険予測をすることが大切である。教師間で気付きや情報の共有を図ってきたが、例えば虫や植物の名前、怪我をした時の対処法など、教師の自然に対する知識はまだ十分とは言えない。定期的にフィールドに出向いてあそび場をチェックしたり、教師自身が様々な自然環境に出かけて知識を増やしたりするなど、園内研修をさらに充実する必要がある。また、保護者に対して、フィールドの森での遊びの様子を発信している回数が少ないことも課題である。活動を行うことへの安心感や、こどもの服装の適切なイメージを保護者に持っていただくためには、どのような場所で、どのような遊びを展開しているのか、写真などを用いながら伝えていく必要がある。怪我や虫刺され、ダニ対策のために、半そでの上に薄手のはおりものを着用して登園するようお願いを連絡することがあるが、気温が高めの日に厚いウインドブレーカーを着てくるケースもあった。年間を通じて、適宜、保護者に対して山登りや森での活動で適切な服装を伝えていくことが重要である。

「ひみつのもり」での活動を始めて1年が経とうとしている。こどもたちは、今まで以上に自然の中で遊ぶことに対して意欲的になり、今まで抵抗があった園児も土に触れたり、歩いたり、汚れたりすることに少しずつ慣れてきた。山登りや斜面登り、綱ハンモックを通して、踏ん張ったり、しがみついたり、ロープに掴まるなど、全身を使うことが増えたことで、体力がついたように感じる。引き続き、様々な自然環境の場に出かけるとともに、園庭の環境も変えていく必要があると考えている。



図 23 園庭で遊ぶ様子

園庭では高いところに上ろうとしたり、これまで見られなかった遊びをしたりするなど、こどもたちの姿に変化がでてきている(図 23)。園内環境を見直す良い機会であり、楽しみな課題である。どんなあそび場にしたいのか、どんなことをしたらこどもたちが楽しめるのか、教師が思いを持って保育をすることが、こどもたちの生き生きとした遊びに繋がると考えている。「ひみつのもり」での遊びはまだ始まったばかりである。これからも教師の資質向上をはかっていく決意を新たにするとともに、こどもたちがより一層自然のなかで心と体を開放させていって欲しい、自然が私たちにとって素敵な場所であり続けて欲しいと心から願うものである。

安東裕子 (学校法人愛真幼稚園)

武田信吾 (鳥取大学地域学部)

謝辞

本実施の研究を推進するにあたり、愛真幼稚園の保護者の皆様、教職員各位には大変お世話になりました。ここに感謝の意を表します。

付記

本稿は、2019年8月7日に開催された鳥取県私立幼稚園・認定こども園教育研修大会の第5分科会「さあ森へ行こう！～共に育ち合う～」で安東裕子が発表した内容をもとに、本実践に継続的に立ち会い、大会当日は当該分科会の指導助言者も担当した武田信吾が全体的に加筆・修正を行う形で作成したものである。

註

- 1) フリードリッヒ・フレーベル著・小原國芳・荳司雅子翻訳監修，1981，『フレーベル全集 第四巻 幼稚園教育学』，玉川大学出版部，p. 544（本文中，他の箇所では「こども」を用いているが，引用部分はママで「子ども」と記した。）
- 2) 日本ペスタロッチー・フレーベル学会編集，1996，『ペスタロッチー・フレーベル事典』，玉川大学出版部，pp. 132-134
- 3) 学校法人愛真幼稚園・理事長大前幸正（当時）編集責任，2007，『愛真幼稚園百年史』，pp. 88-93
- 4) 学校法人愛真幼稚園・理事長橋原正彦 編集責任，2017，『愛真 110 年記念誌』，pp. 30-35